

# 近代オランダにおけるレクリエーションスポーツの普及 ～サッカーを中心にして～

石川 恭 上原三十三  
愛知教育大学保健体育講座

## Spread of Recreational Sports in the Modern Netherlands ～ Focussing on soccer ～

Takashi ISHIKAWA Satomi UEHARA  
Aichi University of Education

キーワード：オランダ、レクリエーション、サッカー

Key words : the Netherlands, Recreation, Soccer

はじめに。

欧米主要国において、近代に入り、いかにスポーツが普及したか、あるいは、レクリエーションとしてのスポーツが普及したかについては様々な報告がある。しかしながら、近代のオランダについては、これまで我が国で焦点があてられることはなく、スポーツの普及を始め、レクリエーションとしてのスポーツについては報告されていない。例えば近代スポーツの母国といわれるイギリスについては、サッカー、ラグビー、テニス、バドミントンなど、多くのスポーツ種目について、その普及過程が研究されてきた。ドイツやフランスのように、スポーツが軍事教練として普及したケースもある。そもそもスポーツはヨーロッパにおいて、上層階級の娯楽として一部の者に限られていた経緯がある。アメリカでは、19世紀の前半から半ばにかけて野球が庶民の間に普及していった。これは軍事教練としてより、むしろレクリエーションとして普及したと言ってもよい。このように、ヨーロッパ主要国やアメリカにおけるスポーツの普及については、邦訳された文献や日本の研究者が数多く取り組んできたが、オランダについては、これまでほとんど目にすることがなかった。

そこで本稿では、近代オランダにおいて、どのようにレクリエーションスポーツが普及したの

か、また、とりわけサッカーについて、労働者層の間でどのような過程を経て普及したのかを報告し、これに考察を加えることを目的とした。

### 1. 自由時間の明確化

労働と余暇が渾然一体をなしていた産業革命以前の生活様式は、家内工業が工場制工業に、農村的な生活が都市的生活に移るにつれて崩壊し、生活空間は職場と家庭とに分離された。すると生活時間も労働時間と自由時間、雇用主の時間と労働者の時間とに峻別されるようになった。多くの人々が、漠然とした暇な時間 (spare time) ではなく、労働時間に対立した意味での自由時間 (free time) を初めて意識するようになった。農業社会の一日は陽光とともに過ぎたが、工業社会の一日は始業時刻と終業時刻が固定化され、雇用主により時計によって支配されるようになった。(荒井1989, p.1, 11)

このように、自由時間が人々の日常生活で意識されるようになったのは、工業化が進んでからのことである。日曜祭日といったキリスト教にもとづく古来からの休日を除けば、工業化以前には労働時間と非労働時間の区切りは曖昧であった。ところが19世紀以降、工業化の過程で職場と住居の分離が進行し、時計に従った労働作業が強制されると、労働時間と非労働時間の区別がはっきり

した。(矢野・他編2001, pp.265-266)

では、オランダにおける労働時間はどうだったのか。19世紀後半から20世紀前半についてみてみよう。

図1を見ると、一週間の労働時間は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて徐々に減少し、1910年頃から1930年頃にかけて顕著な減少が起きた。また、表1から、一日の労働時間は、1910年代を通して10時間程度であったのが、1920年から一気に減少して8時間台となった。1920年代に入って労働時間がここまで減少したのは、1919年の労働法で週45時間労働（一日8時間労働と土曜の半休制）が定められ、夜間と日曜日の労働が禁止されたからである。そして1930年代に入ると、ほとんどの職場で一日8時間労働が常識となった。

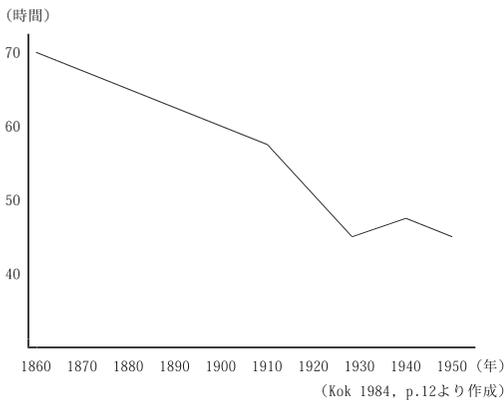


図1 フルタイム従業員の週間平均労働時間

表1 労働時間の変化

年	一日の労働時間	年	一日の労働時間
1908	10.0	1919	9.6
1909	10.0	1920	8.7
1910	10.0	1921	7.9
1911	10.0	1922	8.3
1912	10.0	1923	8.5
1913	10.0	1924	8.6
1914	10.0	1925	8.6
1915	10.0	1926	8.5
1916	10.0	1927	8.5
1917	9.7	1928	8.3
1918	9.7	1929	8.1

(Scholliers 1983, p59より作成)

一般的にあってオランダでは19世紀を通して一週間のうち6日間働き、日曜日を休みとするのが普通であった。つまり土曜日も平日同様フルに働いていたのである。ところが日曜日は休みといっても、キリスト教という安息日であるため、宗教教義に厳格なキリスト教徒は何をしてもよいというわけではなかった。日曜日は、自由な時間といえども、その活動に制限があったのである<sup>(1)</sup>。そのため、今でいう休日という概念は、まだ定着していなかった。ただ、19世紀の後半に至っては、安息日の意味を尊重して日曜日を過ごす人が次第に減ったため、日曜日を自由な時間として過ごす人が増えていた。特に工場労働者は、19世紀の終わりになると、日曜日を労働から解放された自由な日と考えるようになった。

こうして日曜日は、自由な時間として人々の間に定着した。また日曜日以外にも宗教的な祝祭日が年に数日あり、これらの日はほとんどの場合、休日となった。

すると、次に、この自由時間をどのように使うかという問題が生じた。

## 2. 余暇活動の変化

### ～レクリエーションスポーツの普及～

ここで階級と余暇活動について、記しておくことにしたい。というのは、この時代、階級によって自由時間や余暇活動に違いがあったことはもちろん、上層階級の下層階級に対する余暇活動の影響を忘れてはならないからである。

19世紀はじめには、上層階級と中・下層階級の間には、自由時間ももちろん、余暇活動についても歴然とした違いがあった。自由時間が充分にあった上層階級と、ほとんどなかった下層階級では、時間の使い方に違いがあったのは当然のことである。それは自由時間を、楽しみとして使う上層階級と、休養として使う下層階級というはっきりとした違いがみられた。上層階級は、乗馬、舞踏会、観劇・コンサート、演奏、散歩、読書、刺繍、サロンでの茶会、他者訪問などを余暇活動として楽しんでいた。中・下層階級は、自由時間を主に休養に当てていたが、中層階級のなかには、上層階級の真似事をする者も現れた。ただ、氷上

の遊びとして人気のあったスケートやそりは、階級の差がなく、一般的な余暇活動として楽しまれていた。

19世紀が進むにつれて、上層階級に新しい分野の人々が参入してきた。それは、銀行家、大自営業者、成金たちである。彼らは服装とライフスタイルで、裕福さを誇示した。伝統的な上層階級に自分の資金力を示すと同時に、中・下層階級には余暇活動の違いをアピールした。サーカスや寸劇などの見せ物小屋にはいなくなり、メンバー制の劇場やコンサートに出かけるようになった。それまで出地や家柄によって、ある程度線引きされていた余暇活動が、新たな上層階級への参入によって、金持ちか否かで余暇活動に違いが生じるようになったのである。彼らは自分たちで投票制のメンバーシップをつくったり、高い会費を徴収するクラブを設立して、中・下層階級と余暇活動に一線を画した。つまりは労働者階級と同じ場で余暇活動を行うことを嫌ったのである。特に19世紀の終わりになってスポーツが人々の間で人気を呼ぶようになると、上層階級は自分たち以外の階層と、同じ場でプレーすることを避けた。

さて、余暇活動にも色々あるが、その一つにスポーツがある。今日、スポーツは、人々にとって当たり前のように余暇活動の中で楽しまれている。しかし、19世紀後半から20世紀前半にかけてのオランダにおいて、果たしてスポーツは、庶民にとって手軽に楽しめる余暇活動だったのだろうか。本段では、労働者層のスポーツの普及と大衆化について記すことにする。

先に結論めいたことを言えば、スポーツは19世紀の間、労働者層にとってほとんど縁がなかった。日々の過酷な労働と自由時間の少なさから、スポーツを行うこと事態、身体的、物理的に無理があった。それと、何よりも教会が、身体を使った楽しみを休日に行うことに対して批判的であった。休日は、祈りの日、あるいは静かに精神的安らぎを得る時間とされていた。肉体的な楽しみや快楽は、宗教教義に反する悪事として戒められていた。日曜日は安息日として、祈りにうちに静かに過ごさなくてはならなかったのである。

このような状況にあったため、庶民にとってス

ポーツはほとんど縁がなかった。しかし、上層階級にとって教会はなんのその、スポーツを楽しみとして行っていた。もちろん安息日の意味を無視していたわけではないが、日曜日以外にも自由時間はあったし、日曜日とて躊躇することなくスポーツを楽しんだ。教会は、上層階級の規制についてはもともと諦めていた。やがて中層階級についても、スポーツ活動の制限には無理があると考えようになった。労働者階級にとって、スポーツは限られた人たち、自分たちより上位階級の贅沢な楽しみであり、縁遠い活動であった。

そのようななか、19世紀の中頃、オランダでは高等実業学校のHBSで体操教育が導入された。これによって若者がスポーツと接する機会をもつことになった。しかし、HBSまで進学するものは多くないので、庶民にとってスポーツは、依然として縁遠い存在であった<sup>(2)</sup>。

では、オランダにおいて、スポーツはどのように普及していったのだろうか。労働者階級への普及はひとまずおき、まず、スポーツがどのようにオランダに入ってきて、いかに受け入れられたかを記しておきたい。

オランダへのスポーツの伝播は、イギリス、ドイツ、アメリカの影響が大きい。なかでもイギリスの影響は大きく、サッカー、ホッケー、ボート、ボクシングなどがオランダに紹介された。イギリスのスポーツは、組織化、ルール化されていたため比較的受け入れられやすかったのである。また、イギリスは情報伝搬技術（交通・通信）が発達していたため、イギリスから発信されるスポーツが諸外国に広まるのは速かった。加えてイギリスは、当時ヨーロッパのなかで最も尊敬される地位にあったため、イギリスのスポーツは、紳士のスポーツとして、多くの国から注目されていた。こうした背景のもと、1820年代に入ると、イギリスに留学したオランダ人や、オランダに滞在したイギリス人が、イギリスのスポーツをオランダに紹介し、普及が始まった。

イギリスのスポーツは、もともと貴族のスポーツであったものに手を加える形でオランダに導入され、上層階級の間で余暇活動に受け入れられた。一方、ドイツから入ってきたスポーツは、その目

的と活動に違いがあった。ドイツからオランダにもたらされたスポーツは、体操教育が主であったが、その目的は、国民的なナショナリズムの高揚や共同体主義の浸透にあった。特に知識人や中産階級の間で、体操教育は目的達成に最も有効と考えられていた。イギリスのスポーツは個人主義の発想のもと受け入れられたのに対して、ドイツのスポーツ（体操教育）は全体主義や共同体主義のもとオランダへ受け入れられた。体操は、19世紀中頃には、スポーツ種目のなかでもかなりの人口をもち、1910年にはオランダで5番目のスポーツ人口をもつ種目となった。1930年以降は、トップ3に入るまでに成長した。

アメリカについては、バスケットボールとバレーボールがヨーロッパに広まったことが大きい。これらはYMCAによってオランダに普及したが、スポーツを通して社会教育や道徳教育を行おうとする意図があった。ただ、これらの種目がオランダで人気を得たのは、第二次世界大戦後のことである。

もともとオランダで伝統的に人気があったスポーツは、スケートとカーツェンである。ゴルフボールも人気があったが、これはアメリカとスウェーデンのボールゲームを合わせて創られた。これらは気軽に楽しめるスポーツとして、庶民や学校教育の場で行われた<sup>(3)</sup>。

外国から入ってきたスポーツの多くは、初めのうち社会的に地位の高い人が娯楽として行っていたが、1920年代に入ると次第に庶民にも普及し始めた。まず始めに大衆化したのは、それまで上層階級が行っていたサッカーであった。これは既に中産階級の間で20世紀初めに行われていたが、一般的に広まったのは、それよりも少し後であった<sup>(4)</sup>。

これは1919年の法律で定められた8時間労働の影響が大きい。一日の労働時間が8時間になったことと、土曜日の半休制によって、週間労働時間は45時間となった。これによって労働者たちの自由時間は、平日の夕方以降と、土曜日の午後、そして日曜日と、それまでと比べてかなり長くなったのである。これをきっかけに、人々は、自由時間を様々な活動に使うようになった。その一

つがスポーツであった。また、1920年代には中等教育への進学者が増え、学校教育でスポーツを経験する子供が増えた。サッカー、水泳、自転車は、大人も子どもも楽しめるスポーツとして、広く人気を得た。これらのスポーツは、比較的早い時期に労働者層へ普及したが、テニスやフェンシングが庶民の間で行われるようになったのは、かなり後のことであった。

スポーツの普及については、縦割り社会の影響も忘れてはならない。当時、スポーツは、自由時間の楽しみとしてだけでなく、教育的効果や、人生観の形成に有効だと認識されていた。1900年頃には、それぞれの柱のなかで、スポーツが社会生活の一部として取り上げられていた。まず始めに採用されたのが、サッカーと体操であった。その後、様々なスポーツがそれぞれの柱のなかで取り上げられるが、人気があったのは労働者層に広く支持されたサッカーであった。

プロテスタントの協会は、1910年にキリスト体操協会、1929年にキリストサッカー協会を設立した。これに対して、カトリックがスポーツ協会を設立したのは、第二次世界大戦後と遅かった。スポーツはカトリックにとって、長い間、宗教的、または、道徳的に問題であると考えられていたからである<sup>(5)</sup>。一方、社会民主主義者は、1926年にオランダ労働者スポーツ協会を設立し、体操と水泳を奨励した。肉体と精神の調和・発展、共同体意識の高揚を目的としたのである。このようにスポーツは縦割り社会のなかで、それぞれの柱が意図する教育的効果を狙って広められた。

では、20世紀に入ってからオランダにおけるスポーツ人口はどうだったのか。Mol (1998, p.23)によれば、最初の30年間の成長が大きかった。オランダのスポーツ人口は、1900年にはおよそ3万人、1910年には6万5千人、1920年には15万人、1930年には27万8千人となった。30年間の間、スポーツ人口が多かった種目を順に挙げれば、サッカー、スケート、体操、テニス、カーツェンである。

### 3. レクリエーションとしてのサッカーの普及

ここでオランダの国民的スポーツであるサッ

カーを取り上げ、その普及の様子について記すことにする。サッカーは前述したように、労働者層へのスポーツの普及のオピニオンの存在であり、スポーツ人口としても最も多い種目であったからである。

イギリスからオランダに入ってきたサッカーが、上層階級からより下位の階級へ普及してゆく過程には、エンジニアの存在があった。産業化が進むなかで、工場のエンジニアは、労働者にチームスポーツの普及を訴えた。これはエンジニアがイギリスから来たお雇い技術者であったことも関係しているが、それよりも、チームスポーツが企業の生産量や業績を上げるのに有効であると考えられたからである。工場労働者にサッカーを普及させることは、サッカーチームを通して我々意識を形成し、それが、いずれ工場全体の我々意識の高揚にもつながると考えたのである。そうすれば、チームとして製品を生産しているという意識をもち、互いに助け合って効率よく仕事に取り組むようになるというわけである。サッカーは、こうしたチーム意識の形成に最も有効だと考えられた。

また、エンジニアたちの祖国イギリスでは、19世紀にスポーツが庶民に普及し始めていたこともあり、オランダが19世紀の終わりになっても上層階級しかスポーツを行っていないことにイギリス人は違和感をもっていた。確かに19世紀末のオランダにおいて、十分な自由時間を所有していたのは上層階級だけであったが、オランダのサッカー愛好者（主に上層階級の比較的若い世代）は、労働者がフェアプレー精神をもってスポーツをすることは無理だと考えていた。マナーを守り、紳士のスポーツとされるサッカーに、労働者は似合わないと考えたのである。

それと、サッカーが上層階級のスポーツであった理由の一つに、金銭的な問題があった。チームスポーツであるサッカーは、当然、他のチームと試合をすることになる。上層階級といっても、その数は一つの町に多くはないので、同じ町のチームだけでなく、離れた町のチームと試合を行った。つまり、遠い町のチームと試合をするには遠征費がかかり、労働者層には、そのような金も時間もなかったのである。当時、列車に乗って移動する

遠征旅行は、上層階級ならではの光景であった。19世紀の終わりになって鉄道網が整備されると、次第に上層階級の子どもたちが比較的近い町の子どもとサッカーの試合をするようになったが、彼らは互いに上層階級の子弟が通う私立学校のサッカーチームに所属していた<sup>(6)</sup>。

それでは、サッカーの普及について、デンボスの町を事例に見てみる<sup>(7)</sup>。

意外にもサッカークラブがこの町で初めてつくられたのは、上層階級のクラブではなく、教育期にある若者たちのクラブであった。市立学校、ギムナジウム、国立高等実業学校の生徒たちが集まって、1890年にサッカークラブがつくられた。クラブ名は「ビクトリア」で、北ブラバント州唯一のサッカークラブであった。クラブの発足は、生徒たちによるものではなく、町が音頭をとって行なった。

当時の若者たちにとって、日常生活の楽しみは、カフェに行くことぐらいしかなかったため、クラブはたちまち人気となった。都市が設立したクラブは、メンバーを上層階級の子弟に限ることなく、広く一般に解放したため、若者たちの支持を得たのである。しかし大人たちは、自分の子どもがクラブに入ってサッカーをすることに消極的であった。野蛮なイメージと、なによりも衣服や身体が汚れるからである。それでもサッカークラブに入会する若者は、後を絶たなかった。クラブに所属している子どもが学校の成績が下がると、親はいつもサッカーのせいにした。できるだけサッカーに、自分の子どもが没頭しないことを望んだのである。

しかし「ビクトリア」の人気は落ちなかった。1897年には、「ビクトリア」のメンバーがあまりに多くなったため、もう一つのサッカークラブがこの町につくられた。クラブの名は「ウィルヘルミナ」。こうしてデンボスに二つのサッカークラブができ、組織的にも整備され、少しずつ人々の間に親しみのあるスポーツとして認識されるようになっていった。19世紀末から20世紀の初めにかけて、用具や運動場の整備が進められると、サッカーは教育期の若者だけでなく、デンボスの市民一般に普及していった。

デンボスのサッカーチームは、1908年から翌年にかけて、ロッテルダムのサッカーチーム「スパルタ」と試合を行い、数千人の観衆を集めた。街をあげての応援団も結成され、サッカーはデンボスにおいて、20世紀の初めにはかなり市民権を得るようになった。このとき既に、上層階級と労働者層は、それぞれのチームを結成して、サッカーを行っていた。しかし20世紀が進むにつれて、労働者層の間ではサッカーが益々普及したが、上層階級では次第にサッカー離れが起きていた。上層階級はサッカーを、それまで自分たちだけのスポーツとして、ある種の特権意識をもって行っていたが、それがなくなったからである。彼らにとってサッカーは、階級差を示すブランドでもあった<sup>8)</sup>。

サッカーが、上層階級の間で下火になっていったのに対し、労働者の間ではレクリエーションの機能を持つようになった。それまで労働者のレクリエーションといえば、室内でカードゲームをするか、他人と世間話をする程度であった。あるいは行きつけのバーで酒を飲んで酔っぱらうことで、日々のストレスを解消したり、気分転換をしていた。しかし労働者は、酒を飲んだり部屋のなかで遊ぶより、外で体を動かす方が健康的だと考えるようになった。だが、工場経営者は、労働者がサッカーをすることに消極的であった。日々の労働で疲れた身体をさらに動かすことは、疲労が蓄積し、作業効率が落ちると考えたからである。しかし労働者のサッカー人気は落ちなかった。労働者は、工場の仲間たちとサッカーチームを結成するほど、サッカー人気は高まった。方々でチームが結成されると、工場対工場、都市代表対都市代表といった試合が催されるようになった。こうした動きが拡大すると、労働者層は組織をつくって自分たちの権利を経営者に主張した。自由時間の確保と余暇活動に対する不干渉である。

労働者層のサッカー人気がそこまで高まると、企業家は、もはや無理な圧力をかけて規制をすることは難しくなった。それどころか規制をすれば、労働者たちとの対立を生み、むしろ不利益を被ることにさえなりかねなかった。労働者にとって絶対的な存在であった経営者は、時代の流れと社会

の変化に対応せざるを得なくなったのである。

そのようななか、工場経営者のなかにはサッカーチームのオーナーとして、労働者との関係を良好に進める者が現れた。1906年、デンボスのある葉巻工場主は、サッカーチームのパトロンになった。1913年には、フィリップスが自社のサッカーチームを結成した。企業家は、労働者のサッカーチーム結成に次第に協力的になっていった。

オランダ全土でサッカークラブに所属していた者は、1910年に7,500人であったが、1920年には42,000人に増えた。もはやサッカーは、庶民のスポーツとして広く普及した。土曜日が半休となったことの効果は大きく、午前中に仕事を終えた労働者は、午後になると、そのまま自分たちのクラブチームでサッカーを行った。

また、労働者にとってサッカーは、単なるレクリエーションだけでなく、別の意味をもち始めていた。サッカーが自己表現の場となったのである。仕事で成功することや、上司に認められて出世することが難しかった労働者にとって、サッカーで活躍することは、他者からの尊敬を得、時には英雄にもなったのである。自分の能力を他人に認めさせる平等かつ最良の場がサッカーであった。だが、労働者たちの中でサッカー熱が激しくなるにつれて、アマチュアからプロ化するクラブが現れ、様々な問題を生むことになった。同じ環境のもとで試合をすることが困難になったからである。人的トレード、練習時間、設備の違いなどから、状況が変わってしまったのである。

1930年代になるとオランダのサッカーは、他国と試合をするまでに発達し、国際的なスポーツとして認識されるようになった。オランダでサッカーの完全なプロ化が起きたのは第二次世界大戦後であったが、それ以前にも優秀な選手は外国のチームでプレイするようになっていた。

では、実際に、オランダのサッカークラブは、どのくらいの規模であったのか。主要都市のクラブ数を示しているのが、表2である。これらの都市は、オランダを代表する都市であり、政治・経済の面でも、長い間、影響力を持ってきた。19世紀以降、近代化（工業化）が進む中で、これらの都市に移り住む労働者、特に工場労働者が増え、

都市の人口は大きく膨れ上がった。労働者層へのスポーツの普及という点では、最も進んでいた都市といってもよい。

表2 主要都市のサッカークラブ数

都市名	1921年	1931年	1941年
アムステルダム	171	181	185
ロッテルダム	46	163	180
デンハーグ	37	67	130
ユトレヒト	40	50	48
ナイメーヘン	21	32	38

(Mo1 1998, p.90より作成)

表をみると、主要5都市のサッカークラブ数は、1921年から着実に増加している。都市別に10年ごとのサッカークラブ数の変化を見ると、アムステルダムでは、もともとクラブが多かったせいもあり、180前後の間で少し増えている。ロッテルダムの増加は大きく、1921年から10年間で117クラブも増えた。その後10年間の増加は17クラブであることから、1920年代の普及がめざましかったことがわかる。逆に、デンハーグでは、1930年代の方がクラブ数の増加が顕著である。1921年から1931年にかけては30クラブの増加であったのに、その後10年間は63クラブ増えている。ユトレヒトでは、1921年から10年間に10クラブ増えた後、1941年にはやや減っている。ナイメーヘンもどちらかという、1920年代の方が1930年代より伸びが大きい。デンハーグを除いた4都市では、1930年代よりも1920年代の方が、サッカーの普及が目覚ましかった。

1921年、1931年、1941年と、三つの時点で5都市のクラブ数を比較すると、面白いことに気づく。1921年のアムステルダムのクラブ数は、他の4都市を合わせた数より多い。この時点では、アムステルダムにおいて最もサッカーが普及しており、その他の都市はまだそれほどでもなく、横並び状態であった。それが1931年になると、ロッテルダムのクラブ数が急増したことで、アムステルダムとロッテルダムは、オランダの二大サッカー都市になった。このときデンハーグのクラブ数は、まだそれほど多くないが、1941年になると、アムステルダム、ロッテルダムに次ぐサッカーの普及都市となる。1941年の時点で、これら3都市

のクラブ数は、ベスト5といわれる都市の85%を占めた。サッカーは、アムステルダム、ロッテルダム、そしてデンハーグと、都市の規模が大きい順に、その普及も早く進んでいたことがわかる。つまり、サッカーの普及は、オランダ全土で一斉に起きたわけではなく、大きな都市から順に進んでいったといえる。

次に、ミクロな視点から、一つの都市に絞ってサッカーの普及を見てみることにしたい。

表3は、アムステルダムのサッカークラブ数とそのメンバーの数を、1921年から1938年にかけて、連盟別に示している。サッカークラブといってもその設立母体や支援団体は、全て同じであるわけではない。多くのクラブは、その母体となる連盟に所属しているのである<sup>(9)</sup>。サッカーの普及には、連盟の影響も忘れてはならない。

表3 アムステルダムのサッカークラブ数とメンバー数、チーム数

連盟名 年	クラブ数				メンバー数				チーム数 1921
	1921	1931	1935	1938	1921	1931	1935	1938	
アムステルダムサッカー連盟	76	132	167	144	43	104	144	130	252
アムステルダム市民サッカー連盟	38	種	種	17	18	種	35	種	88
ロートラックアムステルダムサッカー連盟	16	23	28	27	4	19	27	25	56
アムステルダム市民サッカー連盟	14	種	30	30	7	種	9	11	15

(Mo1 1998, p.47.89より作成)  
注：「メンバー数」の単位は100人。「チーム数」は1921年のみデータ有り。

表を見ると、アムステルダムサッカー連盟は、1921年から1935年にかけて、クラブ数、メンバー数ともに増え、その後はやや低迷した。クラブ数とメンバー数を年毎に見ると、1921年には1クラブ平均して57人のメンバーがいたが、1931年には79人となった。1935年になると1クラブ平均86人、1938年には90人まで増えた。1930年代後半にクラブ数とメンバー数の伸びは止まったが、1クラブのメンバーは増えていた。この連盟が抱えるサッカー人口は、アムステルダムの中でかなりの大きな割合を占めていた。

労働者層の団体であるアムステルダム民衆サッカー連盟は、データの多くが欠損しているためはっきりとは言えないが、1921年の時点では、アムステルダムサッカー連盟に次ぐ勢力であった。しかし1938年にはクラブ数が1921年の半数以下になった。メンバー数は1921年から1935年

の間に約二倍になっていることから、もし1938年にメンバー数が激減していない限り、1クラブのメンバーはかなり多かったと推測される。

宗教派のサッカー団体であるローマカトリックアムステルダムサッカー連盟は、クラブ数、メンバー数ともに、アムステルダムサッカー連盟と同じ様な変化をしているが、違いは1クラブの平均メンバー数の増加である。ローマカトリックアムステルダムサッカー連盟は、1921年から1938年にかけて、1クラブの平均メンバー数が25人から93人へと増えている。これに対してアムステルダムサッカー連盟は、同じ期間で、57人から90人である。つまり、1クラブのメンバーの増加率が、ローマカトリックアムステルダムサッカー連盟はかなり高いことになる。これは1921年の時点で、カトリック連盟のサッカークラブの数に対して、そこに所属するメンバーがそれほど多くなかったことを意味している。カトリック派の人々の中でサッカーは、まだそれほど普及していなかったのである。

アムステルダム企業サッカー連盟に所属するクラブは、企業をオーナーとしているため、1クラブ当たり30人から50人程度の比較的少人数のメンバーで構成されている。企業が資金を援助しているため、少人数でも運営が可能であることと、会社の従業員で構成されているので、それほどメンバーは多くない。それにしてもアムステルダムだけで、1935年と1938年に30ものクラブがあったのである。1921年のクラブ数とチーム数がほとんど同じであるのは、1企業1チームが普通だからである。

年毎の変化を見ると、1921年には、クラブ数、メンバー数とも、アムステルダムサッカー連盟が多いものの、アムステルダム民衆サッカー連盟もある程度の割合を占めていた。その後、アムステルダム民衆サッカー連盟は低迷していった。ローマカトリックアムステルダムサッカー連盟とアムステルダム企業サッカー連盟は、いずれの年においても全体の10%程度の割合を占めていた。

全体を通して見ると、アムステルダムでは1921年から1935年にかけて、クラブ数とメンバー数が増え、その後は落ち着いた。だが、1クラブ

に所属するメンバーの人数は、年が進むにつれて増えた。

特筆すべきは、アムステルダムサッカー連盟の占める割合がかなり大きかったことである。特に1930年代になると、アムステルダムではこの連盟に所属するクラブが大多数派で、その他は少数派となった。それはメンバーの人数からもわかる。アムステルダムにおいて、この連盟がサッカーの普及に果たした役割は大きかった。

しかし、連盟がサッカー人口を増やしたというよりも、サッカーの普及に組織的な貢献をしたといった方がよい。サッカーは、20世紀に入って労働者層の自由時間の増加とレクリエーション欲求の高まりから、自然に大きくなった余暇活動の一つである。はじめは同好会や市町村のクラブから始まったサッカーも、活動人口が増えるにつれて、企業や縦割り社会がそれぞれの目的のもと、クラブを支援するようになった。連盟は、クラブの設立背景や、クラブ活動の目的・意図が同じであるものが集まりできた多くのクラブをまとめる組織である。連盟は後に、新たなクラブの設立や所属するメンバーに対して、指導・支援を行うようになったが、ほとんどの場合、クラブ同士の試合や大会など、組織の維持と運営に関わった。連盟が自ら人々を勧誘してサッカー人口を増やしたわけではなく、サッカーは、人々の間で自然にわき起こった余暇活動欲求から、人気のあるスポーツとして爆発的にその活動人口が増えたのである。

人々はクラブを中心に活動し、連盟は多くのクラブをまとめる組織としての役割を果たしたことで、サッカーは広くオランダに普及したのである。

最後にチーム数について触れておくと、1921年の時点では、それぞれの連盟に所属するクラブ一つに対して2から3のチームが存在した計算になる。これは一つのクラブに、年齢や人数構成の理由から、幾つかのチームが編成されていたためである。1クラブ1チームでは、試合に参加できる者が限られてしまうからである。ちなみにアムステルダムサッカー連盟とアムステルダム民衆サッカー連盟は、連盟のメンバー数をチーム数で割ると、およそ20人となる。つまり1チームのメ

ンバーは約20人であり、サッカーをするには適当な人数である。これに対してローマカトリックアムステルダムサッカー連盟とアムステルダム企業サッカー連盟は、宗教的な背景や企業チームという理由から事情が異なり、1チームの平均人数は多かったり少なかったりした。

#### おわりに.

労働時間の減少が、自由時間のスポーツ活動に与えた影響について、サッカー、水泳、サイクリングの3種目については明らかに大衆化への影響があった。サッカーは、1920年代に庶民の間に広がったが、それは1919年の法律で定められた8時間労働の影響が大きかった。また、1920年代には労働者階級の子弟の中にも中等教育へ進学するものが増え、学校でスポーツに接する機会を得た。後に彼らがスポーツを社会へ普及させることに貢献した。また、縦割り社会を構成する柱が、それぞれの意図する教育的効果をねらってスポーツを奨励したこともあった。

労働者層に対するサッカーの普及については、イギリスからオランダに来たエンジニアの存在が始めにあった。彼らが、サッカーを通してチームスポーツの団結感を労働者に植え付けることで、工場全体の我々意識の育成や業績向上につながると考えたからである。

デンボスでは、教育期にある若者たちがサッカーの普及に果たした役割が大きい。町の後押しもあったが、後にデンボスのサッカーチームは他の都市のチームと試合を行うようになり、これを見た観衆がサッカーを始めるという具合に、サッカー人口は労働者層の間で次第に増えていった。こうして労働者層の間に広まったサッカーは、レクリエーションとしての機能を持つようになったと考えられる。それまで、これといったレクリエーションがなかった労働者にとって、サッカーは気分転換や身体運動の欲求に十分応えたからである。当初、企業家は自社の労働者がサッカーをすることに反対だったが、もはやその勢いを止めることはできなくなった。すると一転、工場経営者の中には、自社のチームを結成し、宣伝に利用する者も現れた。

オランダ全土でサッカーの普及を見ると、1920年代から、そして大都市から地方都市へと都市の規模が大きいものから順に広がっていった。アムステルダムの例からもわかるように、人々は、サッカークラブを中心に活動し、サッカー連盟は多くのクラブをまとめる組織としての役割を果たしたことで、サッカーが広くオランダに普及したといえる。

イギリスに遅れて半世紀、オランダでは1920年代にスポーツが普及したが、これは労働者の自由時間の増加、特に工場労働者の労働と余暇の峻別がはっきりしたことで、レクリエーションとしてのスポーツが広がったといえよう。

#### 〈注〉

- (1) 19世紀の間、多くのオランダ人は、日曜日になると、二、三度、教会へ足を運んだ。教会で祈りを捧げた後は、家に戻って静かに過ごすのが一般的であった。日曜日に数回教会へ行くということは、一日のほとんどが宗教の内であった。日曜日はキリスト教徒にとって、宗教とともに過ごす一日といっても過言ではなかった。
- (2) スポーツの普及に学校教育の果たした役割は大きい。学校教育における体操の導入は、それまでスポーツを行ったことのない若者が、初めてスポーツを経験することになったからである。しかしその背景には、若者の強健な身体の形成、ひいては将来、国家の防衛に貢献できる人材の養成といった目的があった。もちろんスポーツの普及は、学校教育によるものだけでなく、スポーツに対する民衆の欲求と社会的要請が大きく影響していたことに違いはない。

また一方で、スポーツは人と人との関係を円滑にすると考えられた。この考えは、学校教育だけでなく、後に一般的な民衆に対するスポーツの普及と発展につながった。

ちなみにオランダにおいてスポーツの普及に多大な貢献をしたミュージーラー (Pim Mulier) は、この考えのもと、4デイズマー

チ（「歩け歩け運動」といわれる4日間歩き通すウォーキングラリー）、エルフステーショントッホト（運河沿いに立ち並ぶ11の市町村をスケートで走り抜ける全長200キロメートルにも及ぶスケートマラソン）などの国民的なスポーツ祭典の開催を成功させた。またミューラーは、多くのスポーツ協会設立に貢献し、スポーツを普及・促進した功績から、オランダではスポーツ発展の父といわれる存在である。オランダ初のサッカークラブをつくったのもミューラーであった。

- (3) カーツェンは、手をラケット代わりに使ってボールを打ち合うスポーツ。1チーム3人で構成され、守備側と攻撃側の2チームに分かれて行う。

ゴルフボールは、アムステルダムで教師をしていたNic Broekhuizenが考案した。1チーム4人（男女2名づつ）で行うボールゲーム。2チームで戦い、ゴルフというバスケットにボールを入れ合うスポーツ。

- (4) というのは教会は、中・上層階級のスポーツ活動はともかく、労働者層がスポーツを楽しむことに難色を示したからである。しかし現実的には、もはや労働者のスポーツ活動を制限することは難しかった。そこで教会側は、協会を通して対応策を検討した。

1900年12月、日曜日の安息推進オランダ協会（Nederlandse Vereniging tot Fevordering van Zondagsrust）では、会議の席上、土曜日にスポーツをして日曜日を安息日とするよう、まず公務員の勤務時間を土曜日は午後1時までとしたらどうかという提案がなされた。つまり土曜日の午後1時以降を自由時間として、スポーツをする時間に当てようというのである。これを時の政府に進言するかどうかの議論がなされたが、結局、内部では反対の声が多く、否決された。スポーツの価値はそれほど大きいとは考えにくいし、もし政府がこれを認めるようなことが起これば、いずれ日曜日にも適用されると予想したからである。（Franssen1976, p.489）

労働者層にスポーツが普及することで、教

会離れが進むことを危惧した協会の態度は頑なであった。

協会は、1907年にサッカークラブの弊害についても次のように言及した。

サッカークラブは人々を教会から遠ざけ、メンバーはキリスト教の行事や慈善事業に参加しなくなった。サッカーは、中・上層階級が行うスポーツであったが、徐々に労働者層に普及して多くの望ましくない状況が起きている。教会で説教を聞く人が減れば、人々の道徳心の欠如が起る恐れがある。（Franssen1976, p.490）

しかし協会の心配をよそに、20世紀が進むにつれて、スポーツは休日の余暇活動として人々の間に浸透していった。

- (5) カトリック教会は、サッカーを長い間嫌っていた。それはサッカーが、精神とはおよそ無関係であり、肉体を使った好ましくない活動だと考えていたからである。しかしサッカーが、普及したことで、立場と見解の変革を余儀なくされた。労働者たちのスポーツ活動を受け入れ、認めざるを得ない状況になったのである。あくまでサッカーを否認する立場をとり続ければ、多数派である労働者層の教会離れが益々進むと判断したからである。また、カトリック教徒に厳しい教義を課し続けることは、いずれ教徒が他の宗教派に移ってしまうのではないかという不安もあった。縦割り社会の中で、カトリックの勢力を維持することからも、サッカー容認に踏み切らざるを得なかったのである。だが、サッカーをカトリック教徒内の活動に留めることで、他の宗派との接触を、できるだけ絶とうとした。そして1918年、ついにカトリックのサッカーチームが結成された。後にカトリックのサッカーチームからなるリーグもつくられた。

- (6) 当時の教育学者は、学校教育でサッカーを行うことに、はじめのうち否定的であった。サッカーを野蛮なスポーツと考えていたからである。一方、スポーツのなかでも、体操は教育的効果が大きいと考えた。規律を重んじ、きびきびとした動きは、社会生活を営む上で役

に立つと考えたからである。そのため学校では、教師たちがサッカークラブよりも体操クラブを奨励した。子どもの間でも、体操クラブに所属しているものが、サッカークラブを見下すような風潮があった。(Gaal 1995, p.292)

- (7) 一般庶民におけるサッカーの普及過程については、Gaalの研究が詳しい。Gaalはサッカーの普及について、19世紀末から20世紀前半にかけてのデンボスを事例に記した(Gaal 1995)。オランダの平均的な都市で、宗教的にも偏りのないデンボスを事例としたGaalの研究を頼りに、本稿ではサッカーの普及を記すことにした。
- (8) サッカーと階級意識について、補足しておく。

労働者層のサッカー人気の高まりに対して、上層階級は、当初、冷ややかな対応をした。彼らは労働者層と同じ場所でサッカーをすることを嫌い、自分たちだけのサッカー場をつくって活動した。また、上層階級は、労働者層のクラブチームとの試合をしばしば拒否した。このようなムードに対して、1889年に設立されたオランダサッカー協会は、1900年の総会で、全国的な試合の組み合わせに階級の壁を取り払うことを採択した。上層階級が自分たちだけでサッカーをするのはよいとしても、公式的な試合に下層階級を参加させなかったり、組み合わせに線引きを設けることは問題だと結論づけたのである。かつては上層階級のサッカークラブと労働者のクラブとで、技術や装備、マナーに差があり、試合をするのに様々なハンディーと問題があったが、1900年頃にはおおよそ解消した。色々な点で未熟であった労働者層のチームも、上層階級のチームに劣らないほど成長した。

しかし1910年の時点で、デンボスの町には、サッカークラブに色分けがあった。上層階級のクラブ「ウィルヘルミナ」(女王の名をつけた)と、労働者層のクラブ「BVV」である。上層階級は、自分たちの階層のクラ

ブチームが全国的に減る傾向にあるなかでも、下層階級とは一線を画そうとした。サッカーが国民的スポーツとして広く普及しようとも、活動する場所や装具、ゲーム後のつきあいに差を設けたかったのである。

サッカーが大衆スポーツとしての地位を確かにした1920年頃、上層階級はサッカーからクリケットやホッケーにスポーツ活動を転向した。その後もサッカーを続けた上層階級の多くは、閉鎖的な社会の中で活動した。1923年のデンボスでは、上層階級は自分たちの間で幾つかのチームを作り、この中だけで試合をした。しかし、最も伝統のある上層階級のチーム「ウィルヘルミナ」は、1937年にメンバーが僅か67人にまで減った。

一方、庶民のスポーツとなったサッカーは、その後も競技人口を増やし、大人から子どもまで幅広い年齢層に支持される国民的なスポーツとなった。そして、上層階級にとってのサッカーは遊びと社交、一般庶民にとってのサッカーは競技スポーツとしての性格をもつようになっていった。

- (9) 四つの連盟について、その背景や性格を記すならば、次のように言える。

アムステルダムサッカー連盟は、最もリベラルで古くからある団体である。宗教的な背景や階級色、思想・信条に偏りがあるわけではなく、一般的に広く開放されている連盟である。

これに対して、ローマカトリックアムステルダムサッカー連盟は、縦割り社会でいうカトリック派に属する人々の連盟である。そのため、他の連盟に所属するサッカークラブに対しては閉鎖的であり、主に自分たちの連盟内で試合を行い活動している。これは、本来サッカーを好ましく思わなかったカトリック教会(協会)が、カトリック派に属する人々を、自分の柱の中に留めんがために、いわば洪々創った連盟といえる。

アムステルダム民衆サッカー連盟は、労働者層が自分たちのサッカーという我々意識のもとに設立した団体である。そのため、ここ

に所属するクラブとそのメンバーは、ほとんどが労働者層の人々である。

アムステルダム企業サッカー連盟は設立母体が企業であるため、運営は企業が全面的に支援した。この連盟に所属するサッカークラブの多くは、企業が自分の会社の従業員のために創ったものである。豊富な資金があり、中には会社の広告塔といった役割をもっているクラブもあった。

### 〈引用・参考文献〉

- 荒井正治, 1989, 『レジャーの社会経済史』, 東洋経済新報社
- De Telegraaf, 1924, De vrije tijd van den arbeider, De Telegraaf.
- Gaal, F.J. van, 1995, “Van gentleman tot volksjongen”, in Van ontspanning en inspanning, Tilburg.
- Franssen, J.J.M, 1976, De bossche arbeider in zijn werk en leefmilieu in de tweede helft van de negentiende eeuw, Stichting Zuidelijk Historisch Contact Tilburg.
- 川北稔編, 1987, 『「非労働時間」の生活史 英国風ライフ・スタイルの誕生』, リプロポート.
- 岸野雄三編, 1984, 『体育史講義』, 大修館.
- Kok, Chris, 1984, Arbeidstijd-verkorting, Uitgeverij Het Spectrum.
- Mol, Peter Jan, 1998, Geschiedenis van de sport in Amsterdam 1918-1940, De Raddr aaier BV Amsterdam.
- Scholliers, Etienne, 1983, Werktijd en werktijdverkorting, V.U.B.
- 矢野久・他編, 2001, 『ドイツ社会史』, 有斐閣.